

夜空に星が多かった頃

私が六年生の頃、敗色濃いアメリカとの戦争の末期、父は家から十二キロほど離れた原始林の中に「三角兵舎」を造るために、職人さんたちと一緒に出かけた。どんな事情で父に会いたくなったのか、そのあたりの記憶はないのだが、とにかく私は、歩いて父のもとまで行くことにした。

「三角兵舎」とは、半地下式の戦闘用兵舎である。地面に長方形の穴を掘り、その上に材木を三角に組んで屋根を造る。その屋根に更に五十センチほどの土を載せる。半地下式だから、爆撃されても直撃でない限り内部の兵士は助かるわけである。

当時の小学生にとっても、十二キロは簡単な道のりではなかった。昼なお暗い原始林に入ってから、怖さも混じり後悔し始めたものである。歩いているうちに、日はすっかり暮れてしまった。手探りで歩く原始林の怖さは、今も私の記憶に鮮烈である。それだけに、前方に灯火がチラチラ見え始めたときの嬉しさは格別であった。

「兵舎」の中では、仕事を終わった職人さんや人夫の人たちが、それぞれ焼酎を飲んだり花札をしたりしていた。みんな少年の私を見て驚いたが、間もなく「小川さん、息子さんがきたよ」と、すでに横になっていた私の父に知らせてくれた。息子の意外な出現は、父にとり嬉しかったようである。しかし、感情を表に出す人ではないから、淡々と私が、どうして急にこんな遠いところまで歩いてきたのかと尋ねた。

仕事を終わった人たちの飯場の雰囲気は、私にとりとても馴染みやすいものであった。夜も相当更けたことだし、私は当然その日は飯場に泊まり、翌日遅れて学校へ行けばよいものだと思っていた。丁度十一時頃だったろうか、父が、「義男、もう遅いから、お前そろそろ帰れ」と言ったのである。驚天動地とはこのことである。六年生の少年が、深夜の原始林を越え、十二キロの道をどうやって帰るといふのであろうか。

季節は晩秋だから、熊が出るかも知れない。しかし、父は厳しい人であった。泣けば泊めてくれるというような生やさしい人柄ではなかったのである。それをよく知っている私は、べそをかきながら立ち上がった。「途中まで俺が送ってやるからな」、そう言うと父は私を先に立たせ、すたすたとついてきた。手を後ろに組んでいるのだが、その手に何か大きな枝を持っているようであった。しかし、闇の恐怖に怯えている私に、それが何であるかなど考える余裕などない。

小一時間も密林を歩き、幅広い国道に出た。父はそこで、気長に道路脇の材木に座って私と話をしていた。私は父の真意を測りかねていた。そのうちに一台の馬車が近づいてきた。父は、その馬車追いに、どこまで帰るか尋ねた。その人が私の家のある町まで帰ると知ると、「すまないが息子をそこまで乗せて行ってくれ」と頼んだのである。私がほっとしながら馬車に乗り込むと、父は後ろ手に持っていたひと枝を私に渡し、「これでも食いながら行け」

と行った。

それは、実が重いくらいに沢山ついている「こくわ」のひとつ枝であった。「こくわ」は、北海道の山に生えるもっともおいしい食べ物である。大きなもので大人の親指くらいの大きさであろうか。実が青くてふにゃふにゃしている。甘いというか、酸っぱいというか、それが適度に混じり合って、とてもおいしいのである。私は世の中に、あれほどおいしい食べ物は他にないと、今でも思っている。たやすく手に入る山葡萄とは異なり、深山に入らなければ手に入らないので、そんなに沢山の「こくわ」を食べたのは、そのときが初めてであった。

馬車に揺られながら、時折馬車追いのおじさんの問いかけに答えたりしながら、私は「こくわ」の実を食べ続けた。

ふと空を見上げると、信じられないほどの数の星が煌めいていた。天の川などは、それこそ、かご一杯の銀の粉をぶちまけて、竹箒で掃いたように輝いている。「こくわ」を食べる以外にすることのない私は、じっと夜空を眺め続けた。流れ星が、次々に流れて行く。それまで私は、流れ星は、滅多に見られるものではないと思っていたのだが、三時間も馬車に揺られ続けている間に、ほとんど絶え間なく星が流れているのに驚いた。今とは比べものにならないほどに夜空が澄み切っていたのか、当時の田舎には、明かりらしい明かりがなかったからなのか、あの夜の星の美しさは、自らその後の人生に影響を与えたのではないかと思うほどに美しいものであった。

それから五十年の余、無骨ながら深く私を愛した父はこの世にない。ずっと長ずるに及んでから私は思うのだが、あの夜、父は深夜の原始林を歩いて帰って怖くはなかったのであろうか。当時私にとり父は絶対の存在であったから、恐怖などとは無縁のはずの人であった。しかし、自分も十分に年を取った今、人間は、幾つになっても、決してそれほど大胆になれるものではないことを知っている。また、はるばる遠くまで父を慕ってきた息子を、深夜の路上に追い返す父の心がどんなものであったか、今の私にはそれも分かる。

親の心が分かるのは、自分が親になってからだど、よく言われる。結局親心というものは、子供を育てている間には分かってもらえないものなのかも知れない。

私の教え子たち一人一人にも、その父、母との、珠玉のように美しい思い出があることであろう。しかし、私のように、親に死に別れた後に、しみじみ懐かしいと思うのではなく、できればご両親が元気なうちに、そのありがたさや優しさが分かる人間に育って欲しいと願うのである。

せめて父の存命中に、あの夜の「こくわ」がおいしかったことくらいは語っておきたかった。今私はそのことを後悔している。

(「学校崩壊なんかさせるか」より)